

■ 編集総括

2010年、CSRの世界で歴史に残るさまざまなできごとがありました。

まず、SR(社会的責任)に関する初の国際規格であるISO26000の発行が決まりました。ここに至るまで各国の意見の取りまとめの中でわが国代表団の果たした役割は特筆すべきものがありました。また、わが国ではあまり報道されませんでした。いわゆるクライメイトゲート事件^{※1}の影響が広がり、IPCC^{※2}評価報告書の信頼性に疑問が投げられたりもしました。実際、一部にはCO₂問題について政策を修正した国もあったようです。

そうした中、COP15後の「REDD」に関する議論が大きく進展し、その実効性、重要性に対する認識が世界規模で広がりました。弊社は民間企業として初めて「REDD」に賛同し、インドネシアの熱帯林を対象としたプロジェクトをスタートさせました。これにより国内グループ会社の1年間のCO₂排出量の約50%にあたるCO₂の排出抑制効果(炭素蓄積量の維持・管理)が期待されます。強い情熱で熱心に指導してくださいましたITTOのエマヌエル・ゼ・メカ事務局長、石川事務次長、マー博士、その他の職員の方々に心から感謝を申し上げたいと思います。

一方、資本市場でも企業評価の尺度として利益性に並んでESG(Environment:環境、Social:社会、

Governance:ガバナンス)の重要性が盛んに議論されました。これはリーマン・ブラザーズ破綻後、企業にとってこれらが企業価値を決定的に左右する、という認識が広まったからでしょう。

ことしのCSRレポートも若い世代の人たちが自分たちの発想で自由につくりました。ここ2、3年間のレポートを振り返って、編集、説明責任の果たし方など、年ごとに向上しているのを感じます。しかしまだ不十分なところ、工夫をこらす余地は多いと考えています。企業グループの純粋持株会社としてのCSRレポートはどうあるべきか、若い社員たちは考え続け、模索し続けています。

CSRの概念が社会に浸透することにより、市民が生きやすく、働きやすく、活力のある社会になることを願っております。同時に弊社グループが率先してそうしたモデル組織になれるよう、これから力を尽くしたいと考えております。

皆様のご支援、ご指導を心からお願いいたします。

※1 環境省のホームページ 平成22年7月8日の報道発表資料をご参照下さい
<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=12697>

※2 気候変動に関する政府間パネル

(株)セブン&アイ・ホールディングス
常務執行役員 CSR統括委員会委員長

稲岡 稔

■ 編集後記

「CSRレポート2010」をお読みくださり、ありがとうございます。

今年度は重点項目ごとに有識者の方からご意見をいただく機会を設けてその内容を掲載しました。ご意見の中には、昨年と同様に目標が不明確であるというご指摘もございました。以前から課題となっているこの点への改善策として、今年度のレポートではデータ集の中に事業会社ごとの取り組み実績と次年度の目標を記載しました。次年度のレポートでは今回提示した目標への自己評価を記載し、PDCAサイクルが伝わる報告書にしたいと考えています。

そのほかにも有識者の方からいただいたご意見とし

て、「輸入に頼らざるを得ない商品などから、調達のプロセスをさかのぼってみる」という提案がございました。

次年度からは弊社が扱う商品の生産過程といった調達に関する掲載も充実させていきたいと考えています。

今後も各課題に対する取り組みを深化させるとともに、皆様の関心に応えるレポートを作成していきたいと考えております。皆様には、ぜひアンケートで率直な意見をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

2010年9月
CSR統括委員会事務局
伊藤・小澤・中村(兼任)・赤塚